

『通俗三国志』章題の典拠と方法

—幸田露伴の方法への復帰と再検討—

王 順鑫

『通俗三国志』は、『三国志演義』全編を日本で初めて翻訳したものである。その登場を契機に、中国演義小説を底本とする通俗物が陸続と刊行され始めた。

『通俗三国志』の翻訳底本について、最初に論じた露伴は『通俗三国志』と『李卓吾批評三国志』及び毛宗崗本『三国志演義』との章題を対照させて、その底本が『李卓吾批評三国志』と指摘している。露伴以後、小川環樹氏、徳田武氏、長尾直茂氏などは、本文の対照比較をして、『通俗三国志』と呉観明本及び緑陰堂本『李卓吾批評三国志』、『三国志』、朝鮮版周曰校本『三国志伝演義』との関係を明らかにしてきた。

露伴は章題を比較対象としたのに対して、露伴以後の研究者達は本文比較に集中してきた。現存した『三国志演義』諸版本の数多さに比べれば、露伴の比較範囲は限られたとしか言えない。とは言え、章題比較には本文比較で見えない世界が潜在する可能性も無視できない。

以上を踏まえて、本発表は露伴の方法を再提起し、『通俗三国志』と『三国志演義』諸版本との章題比較を試みる。その結果、以下のことが明らかになった。

第一、『通俗三国志』は章回形式を踏襲しないのは、分巻不分回の『三国志演義』版本の影響を受けたと考えられている。

第二、『通俗三国志』の翻訳底本は総目録と部分的な本文の章題が欠けるようである。よって、『通俗三国志』の総目録は翻訳し終わった本文の章題を纏めて新しく作ったものである。

第三、欠けた章題を訳出するために、『通俗三国志』は『三国志演義』諸版本の本文と批評文のみならず、『資治通鑑綱目』のような史書をも参照した。特に、章題に見える劉玄德のみを「帝」と呼ぶ傾向は『資治通鑑綱目』に共通している。

第四、『通俗三国志』章題の翻訳と整理には統一意識が見える。読者の理解をスムーズにさせようとした故か、『通俗三国志』の章題は底本の表現に拘らずに、人名、用語、形式を統一するように工夫した。

『通俗三国志』章題の典拠と方法

―幸田露伴の方法への復帰と再検討―

国文学研究資料館外来研究員、中国人民大学博士後期課程

王 順鑫（オウ ジュンキン）

○方法と目的

章題比較という幸田露伴の方法論に復帰して、その可能性を確認しながら、幸田露伴の方法論の弱み―具体的に言えば比較対象の数が少なく比較範囲が限られたこと―を克服する上で、『三国志演義』諸版本（二十二種類の版本）との比較を通して、章題という視点で『通俗三国志』の章題の位相を再検討することを試みる。

一、『通俗三国志』について

五〇巻二四〇段。目録一卷。五十一冊からなる。漢字片仮名表記。湖南文山訳とされる。一六九一（一六九二（元禄四）五）年刊。『三国志演義』全篇を日本で初めて翻訳したものである。訳出作業は文山ひとりではなく、弟である称好庵徽菴を含む複数の翻訳者によってなされたと推測される。

二、『通俗三国志』翻訳底本に関する先行研究と問題点

（一）翻訳底本に関する先行研究

（1）幸田露伴「新訂通俗三国志解題評説」（幸田露伴校訂『新訂通俗三国志』、日本文芸叢書第二巻、東亜堂、一九一一年）

今の『絵本三国志』は李本に依るなり。其の毎章の標語は、単行にして対偶せず、第一回「祭天地桃園結義」といふものは、李本の旧に依るなり。

（2）小川環樹「文山訳の原本」（小川環樹著『中国小説史の研究』第二部第二章第三節、岩波書店、一九六八年）

『通俗三国志』巻三八「孔明七擒孟獲」に見える「鬚」の誤字に注目し、『通俗三国志』の翻訳底本は「李卓吾のどれかであった」と結論している。

（3）徳田武「解説」（徳田武編『対訳中国歴史小説選集4李卓吾先生批評三国志』、『ゆまに書房、一九八四年』）

『通俗三国志』の本文中に原文に訓点を施す形で引用された詩歌・書牘・上表文等を比較対照し、『通俗三国志』の翻訳底本を蓬左文庫所蔵本に定めた。

（4）長尾直茂『通俗三国志』をめぐる諸論考」（長尾直茂著『本邦における三国志演義受容の諸相』、勉誠出版、二〇一九年）

『通俗三国志』巻一六本文における表現に見える宮内庁書陵部所蔵『李卓吾先生批評三国志』（緑陰堂本）と朝鮮版周曰校本『三国志演義』の影響。

(二) 問題点

(1)『通俗三国志』の翻訳底本を検討する時に、幸田露伴は章題の比較を推論の立脚点としたのに対して、露伴以後の研究は本文の比較に集中している。章題も小説の重要な構成部分の一つであるが、露伴以後は注目されなくなってきた。

(2) 露伴の研究では、比較対象となるのは『通俗三国志』の章題と『李卓吾先生批評三国志』の章題と『四大奇書第一種』(毛宗崗批評本『三国志演義』)である。現存する『三国志演義』版本の数からみれば、それは非常に限られた範囲で行われた比較研究としか言えない。

▽『李卓吾先生批評三国志』と『四大奇書第一種』のみならず、現存する多数の『三国志演義』版本と『通俗三国志』の章題を対照比較すれば、新知見が発見されるはずである。

三、『通俗三国志』と『三国志演義』諸本における章題

○『通俗三国志』:

①総目録題(総目録に書かれた題) ②巻目録題(毎巻の目録に書かれた題) ③本文題(本文に書かれた題) ④画題(挿絵に付され題) ⑤上欄題(本文上欄に書かれた題)

○『三国志演義』諸本:

①総目録題 ②巻目録題 ③本文題 ④画題(挿絵に付され題) ⑤上欄題(本文上欄に書かれた題)

四、『通俗三国志』と「分巻不分回」の『三国志演義』諸本

(一) 翻訳底本『李卓吾先生批評三国志』(呉観明本)の章題形式

第一回 祭天地桃園結義 劉玄德斬寇立功 第二回 安喜張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

第三回 董卓議立陳留王 呂布刺殺丁建陽

↓「分回」⇨「第〇回」という序数の記しを付ける。両段構成。

(二)『通俗三国志』の章題形式

巻之一 祭天地桃園結義 劉玄德破黃巾賊 安喜縣張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

董卓起兵入洛陽 呂布刺殺丁建陽

↓「第〇回」という序数の記しが見えない。一段構成。紅林健志氏「近世小説における章回形式」(二〇一九年近世文学会春季大会研究発表)によれば、それは軍記の形式に倣うのである。

(三) 分巻不分回系統の『三国志演義』諸本の章題形式

嘉靖本・周曰校本・夏振宇本など「演義」系統の早期版本に属するものと、葉逢春本・余象斗本・誠德堂本・熊弘貴本・楊春元本・鄭世容本・湯賓尹本・劉龍田本・劉榮吾本・朱鼎臣本・費守齋本・黃正甫本など「志伝」系統の諸本。

○【嘉靖本】第一巻

祭天地桃園結義 劉玄德斬寇立功 安喜張飛鞭督郵 何進謀殺十常侍

董卓議立陳留王 呂布刺殺丁建陽 ……

↓「第〇回」という序数の記しが見えない。一段構成。軍記に倣うのではなく、軍記形式に近い分巻不分回系統の『三国志演義』諸本の章題形式を取る可能性。

五、『通俗三国志』と『李卓吾先生批評三国志』(呉観明本)以外の『三国志演義』諸本

(一) 章題の比較

『通俗三国志』章題

李本章題

別本章題

劉玄德破黃巾賊

劉玄德斬寇立功

破黃巾（『三國志平話』）

劉玄德立功破黃巾（劉榮吾本）

斬黃巾英雄首立功（毛本）

陶謙再讓徐州（夏本上欄題）

雲長五關斬六將（楊春元、湯、劉榮吾、

熊沖宇、費本）

關雲長五關斬六將（鄭本）

漢寿侯五關斬六將（毛本）

決漳河水浸冀城（余本画題）

決漳河水浸灌冀州（楊春元本画題）

決漳河之水灌冀州（鄭本画題）

決漳河水浸冀城（劉龍田本画題）

曹操決漳水滄冀州（劉榮吾本画題）

曹軍決漳水滄冀州（黃本画題）

決漳河許攸獻計（毛本）

孔明登台祈風破曹（余本画題、楊春元本画題）

孔明七星壇祈風

七星壇諸葛祭風

孔明定計擒張任

孔明定計捉張任

孔明登壇祈東南風（劉榮吾本）

孔明定計擒張任（熊清波本）

孔明定計擒將（夏本上欄題）

趙咨入魏說曹丕（劉龍田本画題）

司馬炎復築受禪臺（鄭本）

趙咨入魏說曹丕

司馬炎築受禪臺

吳臣趙咨說曹丕

司馬復奪受禪臺

（二）本文の比較

○『通俗三國志』卷之一「祭天地桃園結義」

ソノ後、青州幽州徐州冀州荊州揚州兗州豫州ノ間ニハ、家々ニ大賢良師張角ト書テ敬ヒ貴コト鬼神ヲ礼スルガ如ナリケレバ、張角心ノ内ニ非分ノ望ヲ發シ、先大方ノ馬元義ト云モノニ、金銀ヲ持セ禁裏ニ入テ密ニ十常侍ガ心ヲ結シメ。

○翻訳底本『李卓吾先生批評三國志』（呉觀明本）

青幽徐冀荊揚兗豫、其八州之人、家家侍奉大賢良師張角名字。角遣大方馬元義、暗賚金帛、結交十常侍。

○劉龍田本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊雍豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○鄭本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊兗豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○熊沖宇本『三國志演義』

青徐幽冀荊楊兗豫千里之間、家家侍奉大賢良師、張角遂懷異心、遣馬元義暗賚金帛、結好中常侍。

○湯本『三國志演義』

青徐冀荊楊徐兗八州之人、家家侍奉大賢良師張角名字、角遂懷異心、遣大方馬元義暗賚金帛、結交中常侍。

六、『通俗三国志』における劉備称呼の改変と由来

(一) 翻訳底本『李卓吾先生批評三国志』（呉観明本）章題における劉備の呼称

A 第七三回	劉備進位漢中王	B 第七七回	漢中王痛哭関公	C 第八〇回	漢中王成都称帝
D 第八一回	劉先主興兵伐呉	E 第八三回	劉先主猊亭大戦	F 第八四回	先主夜走白帝城
G 第八五回	白帝城先主託孤				
↓「劉備」から「漢中王」、さらに「先主」へ。魏主・蜀主・呉主の並列呼称。					

(二) 『通俗三国志』章題における劉備の呼称

a 卷三一	玄徳進位漢中王	b 卷三三	漢中王大哭関羽	c 卷三四	漢中王即皇帝位
d 卷三五	蜀帝起兵伐呉	e 卷三五	蜀帝大戦猊亭	f 卷三六	蜀帝夜走白帝城
g 卷三六	白帝城蜀帝託孤				
↓「玄徳」から「漢中王」、さらに「蜀帝」へ。特に、魏と呉の国主が即位しても「帝」と呼ばれていない。					

(三) 『三国志演義』諸本と関係資料における劉備の称帝と呼称変化

○嘉靖本・周本・夏本・熊飛本・夷本・朝鮮本

漢中王成都称帝 ↓ 劉先主興兵伐呉

○葉本、余本、熊清波本、鄭本、湯本、劉龍田本、朱、費本、黄本

漢中王成都即帝位 ↓ 劉先主興兵伐呉

○楊春元本・鄭本・湯本・劉栄呉本・熊冲宇本・費本・黄本

玄徳成都即帝位 ↓ 劉先主興兵伐呉

○ほか

漢中王立皇帝位（劉龍田本画題）

漢中王即帝位（朱本画題）

↓劉備のみを「帝」と呼ぶ傾向も、『通俗三国志』における「漢中王即皇帝位」に一致する表記も、『三国志演義』諸本に見当たらない。

(四) 『資治通鑑綱目』における劉備の称帝と呼称変化

○『資治通鑑綱目』卷十四「昭烈皇帝章武元年」

夏、四月、漢中王即皇帝位。

その後、『資治通鑑綱目』卷十四「昭烈皇帝章武元年」条に「秋、七月、帝自将伐孫權」とあり、卷十四「章武二年」条に「帝進軍猊亭」、卷十四「章武三年」条に「夏、四月、帝崩於永安」とあるように、劉備を「帝」と称するようになった。劉備の死を「崩」という「天子の死」を意味する言葉で記した。↓劉備のみを「帝」と呼ぶ傾向も「漢中王即皇帝位」という表記も『通俗三国志』に一致する。

○熊清波本『三国志演義』序文「重刊杭州考訂三国志伝序」

『三国志』一書、創自陳寿。厥後、司馬文正公修『通鑑』、以曹魏嗣漢為正統、以蜀呉為僭国、是非頗謬。迨紫陽朱夫子出、作『通鑑綱目』、継春秋絕筆、始進蜀漢為正統、呉魏為僭国、於人心正而天道明。則昭烈紹漢之意始暴白於天下矣。

↓蜀漢を正統とする性格は『通鑑綱目』から始まったものである。その性格は、『通鑑綱目』を経て、日本江戸時代の『三国志演義』の翻訳書である『通俗三国志』にも影響を与えたと考えられる。

七、『通俗三国志』章題に見える統一意識

読者を分かりやすくさせる為に、翻訳工房で調整・修正されたと考えられる章題がある。